

寺院行事とイベント的展開

上野法忍

もくじ

はじめに

一、寺院行事の現状と問題点

イ、寺院行事の問題点

ロ、寺院の抱える問題点

寺離れ

住職教師の意識の問題

ハ、イベント的視点

寺院行事の活性化とは、檀信徒の宗教心の開発が主眼である。

宗団の教化運動として「つくしあい」が目指したものは。

二、イベント的展開とは何か

イ、イベント行事の紹介

ロ、イベント行事のポイント

参加者の問題、主催者の問題

三、イベント的行事の具体案

イ、これからの行事のポイント

まとめ

四、参考資料

はじめに

寺院は、長い歴史の中でいろいろな行事を通して多くの人々と関わってきた。そして、寺院は檀信徒の信仰心によって支えられ守られてきた。また同時に、地域社会の中心的存在として、地域文化経済等の発展にも大きな役割を果たしてきた。

しかし最近、社会の急激な変化によって、寺院を取り巻く環境も大きくしかも急激に変わってきた。日本は今や世界のトップクラスの経済大国となり人々の生活も向上した。

一方精神的には、医学の進歩によりますます高齢化が進み、生活形態も大家族から核家族化が進み親子の断絶、いじめ等、多くの問題もあり、それによって“真の幸せ”“生きがい”など求める声が高まって来ている。

このような時、寺院の果たす役割は大きいものがある。今こそ、それらに答えるべく教師の姿勢、寺院の活動を考

えて行くときである。

智山派の総合調査の結果からも、本宗の伝統行事は停滞、低落傾向にあり、寺院の収入につながる葬儀・先祖廻向が活発で、今日の寺院を成り立たせている。このことは、寺院と檀信徒が先祖・お墓によってかろうじて結ばれているにすぎず、住職と檀信徒との人間的結び付きは極めて弱い状況にあることが考えられる。

また、伝統行事を考えると、発想や形態が今日の生活様式や時代感覚に合わず、檀信徒のなまなましい願望に比べ、切実な容貌を満たしていくには形骸化し、マンネリ化している状態である、と指摘されている。

このような時、教師としてしっかりした目的を持ってその目的に近付くための教化活動や、諸行事にのぞまねばならない。

そこで最近各地で行われているイベント行事がたいへん注目され、人気を集めている。そのイベント性を考察することによって行事の活性化を計り、寺院の果たす役割を担って行くことが出来ると思う。それは、「檀信徒との接点はどこか、何を求めて行くか」の観点にたつて、「行事のテーマ内容、運営組織、実施形態、教化資料、広報宣伝など諸方面から検討して行くことである。

なお、この論文では、本宗寺院でも素晴らしいイベント性のある行事を実施して活発な教化活動を展開している寺院もあるが、ここでは一般論として考察して行くこととする。

一、寺院行事の現状と問題点

それでは、寺院で実施されている、伝統行事についての現状と問題点を考えてみたい。まず、イベント性を考える上ですべての行事について検討して行くべきであるが、ここでは次の二行事を検討項目にそって考えて行くことにす

る。

検討行事

施餓鬼会 護摩供

検討項目

- 1、進行状況
- 2、参加者の関わり方
- 3、会の目的と雰囲気
- 4、役割分担
- 5、PR
- 6、視聴覚照明
- 8、参加者年代
- 9、感動的

〈施餓鬼会〉

施餓鬼会は、智山派総合調査でも一番多く行われている行事である。

本宗の法要便覧には、施餓鬼は『仏教救拔焰口餓鬼陀羅尼經』に由来して、餓鬼世界に堕ちてしまった亡者を供養することによって、延命を図る故事に習い行われてきた行事である。

また全国各地で、その地方に則した方法で行われている。

まずは、最初に基本的なやり方、意義を考えてみたい。

その進行状況は〈檀信徒入堂↓ご詠歌練習↓法話↓導師・職衆入堂↓奠供↓理趣經↓導師は施餓鬼壇へ移動↓施餓鬼の文↓施餓鬼略作法↓(智山勤行式)↓廻向↓導師・職衆退堂〉

以上のような内容で行われているのが一般的であるようである。参加者の関わり方は役員、ご詠歌の講員、初盆を迎える人を中心に殆ど高齢者が多く、あまり全員参加の場面は少ない。

古くから行われている行事なので、やり方も定着してマンネリ化している状態である。法話を行う寺院は多いが、内容は布教師まかせて任職がテーマに添ったの内容をお願いすることは少ない、このことも任職の行事への取り組み方の意識の問題である。

《護摩供》

護摩供は、真言宗の特徴ある行事である。護摩は智恵の火で煩惱の薪を焼き尽くし即身成仏をはかる行事である。しかし、智山派総合調査では、本宗大本山や祈禱寺院のように活発に勤められ多くの信仰を集めている寺院もあるが、全体的には、あまり実施されていないのが現状である。

その進行状況は〈導師・職衆入堂↓錫杖経↓祈願文↓普門品↓心経↓光明真言↓諸真言↓諸祈願↓法話↓導師・職衆退堂〉

以上の内容で行われているのが一般的である。また他の行事のなかで護摩を修する場合もある。全寺院が元朝・ご本尊様の縁日ぐらいいは、護摩を修していく事が望ましい。

そして護摩を修する事によって、本尊と教師と参加者が一体となって法悦に浸り、真言宗の教えを体得することが出来ることに、その意味があるのである。

これらの行事の現状から、次のような問題点が考えられる。

- ・ 伝統行事と言うことで、形式化・形骸化していて、目的もはっきりしていない。
- ・ 参加者の関わり方も参加する場面が少ない。
- ・ PRや内容の解説も積極的に行われていない。
- ・ 感動がないので、おつきあいの参加が多い。

つぎに、伝統教団の抱えている問題について考えてみる。

まず最初に、現代人の宗教意識について考えてみたい。それは現代人が宗教にたいしてどういうイメージを持ち、なにを求めているかを知ること、そのニーズ（求め）にどのように答えたらよいかを考えることが、教化の基本姿勢であり、これからの教化活動、行事の持ち方の方向性を示すものであると考えるからである。

日本人の宗教的感覚は、

- 1、悪い事には必ず報いがある
- 2、運命論的考え方
- 3、人間は弱い存在であるという人間観
- 4、祖先崇拜
- 5、現世利益への期待

宗教を信仰することは自分にとってどういう意味があるか、

- 1、心のささえ、よりどころ
- 2、心のやすらぎ、落ち着き
- 3、先祖を敬う、弔う
- 4、精神修養、向上心
- 5、現世利益（NHK世論調査）

以上のことから宗教的感覚と信仰の意味とは共通性があることが分かる。つまりイ、因果応報的考えから、精神修養などに励む。ロ、運命論的考え方から心のやすらぎを求めて信仰する。ハ、人間は弱い存在であるという人間観から心の支えを求めて信仰する。ニ、先祖崇拜することから先祖を敬い、とむらう。ホ、現世利益への期待から現世利益を祈る。このことが現代人のニーズであり、このことを踏まえた教化活動をして行くことが必要である。

この報告をみても自分が幸せに、健康に楽しく暮らすためには宗教に期待している事が大きい事が分かる。このことに気が付いてその願いを満たしている所に新宗教の人氣がある。しかし、そこに信仰形成が必要なのは言うまでもないが、本宗の教化活動では、そのことに充分に答えているとは言えない。

また、現在の伝統教団には共通する問題をかかえており、各方面から指摘されるところではあるが、イベント性を

取り上げるうえで、一応次の二点を問題点としておく。

「第一点は寺離れ現象である。その原因については、次の五つが考えられる」

イ、都市の人口の空洞化と地方の過疎化。

ロ、核家族化が進み、伝統的宗教慣習の子や孫への伝承が困難になりつつある。

ハ、社会教育とレジャー施設などの社会活動の充実に伴う寺離れ現象。

ニ、自然をまもり、自然と共に生きて来た祭、寺院行事の衰退。

ホ、僧侶の社会性への積極的意欲の欠如。

「第二点は伝統意識によるマンネリ化である」

イ、伝統という事で、行事をなぜ行うのか、何のために、何がテーマか、何を説くのかと行った問いかけもなく、ただ継続しているだけである。

以上の二つの問題点、つまり、現代人のニーズに充分に答えていない、寺離れ現象、行事のマンネリ化について幾つかの指摘がある。

昭和四十三年に提唱された《つくしあい運動》の理念もまたこのような宗団の現実を直視したものと思われる。次のように言う。

・「生命が自己のものではなく如来のもの（法身慧命）であることを自覚し、この自覚にたつて素直に謙虚に一生懸命（三摩地）人間がしあわせに生きるため励むことが大切である」このことに注目して信仰運動を展開していくべきである。

また智山教化研究所から『これからの寺院行事』が発行されているが、そこにも同様の指摘があるので、紹介して

おきたい。

・宗団は教化団体であることは明らかであるが、本宗現行諸行事だけでは、その意義づけ及びその内容の面において、充分とは言えなくなって来ている。この点を考慮しながら従来の諸行事の現代的意義づけをし、更に教化団体として必要な新しい行事を補足して、現代の寺院におけるあるべき行事の姿を考える。

・諸行事の実施状況は、大部分が伝統的な行事のみ行っている。

・もし行事に参加するものの生活に信仰が確立していなかったら、模倣だけの形骸となり、祈禱、回向の行事は世間的人間の欲望追求の場になってしまふ、等。

寺院行事のイベント的展開を問題提起することも、この延長線上にある。つまり、次の四つの事項として考える。

第一にもし一般的イベントからの印象から暗いイメージの寺院を明るくしたい、行事を賑やかに行い、行事の活性化つまり経済的問題だけを考えるなら、それは誤解も甚だしいと言わなければならない。

それは行事の本来的ありかたを見失ったものである。行事とは、「大日如来の世界」を直接的に体験し、「法悦」に浸り感動することが真言宗の基本的立場であると考えるからである。これが、たまたま伝統の名の下に、任職にも檀信徒にも形骸化し、マンネリ化して、意味の分からないものになって来ているのである。

第二に現代人は感動する場面が極めて狭められて来ている。

第三に昔は村の伝統行事はその住民の精神を集約し、仲間意識を形成する役目を果たしていた。現在ではベッドタウン化して、人々の意識は企業・職場意識が強くなって、それだけ地域への帰属意識も薄れて来ている。この辺の心理的動揺をイベント性は指摘しているものと思われる。

また第四に、イベントは手段であって目的ではない。つまり、教師と檀信徒がともにご本尊の信仰にめぐみ、信仰

ある生活をして行くことが目的であり、そのことをしっかりと把握し、その目的を達成する方法として行事を行うのである。

しかし、最近では伝統行事の名の下に、行事を行う事が目的となつて、行事を継続していくことが行われてるに過ぎない。そして、そのことで主催者側だけが満足しているだけの行事となつている。このことははっきり認識することが大切である。また、目的がしっかりしていれば、行事の方法は伝統にとられずに現代のニーズにあった形で行うこともできる。

イベント性を考えることも、このことを再認識して、行事を通して本来の目的にそつた活動を推進して行くことである。

二、イベント的展開とは何か

現在、全国各地でイベント行事が盛んに行われ、多くの人々が参加してそれぞれに成果を上げている。大企業のイベント行事や本宗寺院でのイベント行事も行われているが、ここでは、次の三つの実例をあげ、その特徴を検討することによって行事の持つイベント性を探つて行きたいとおもうのである。

実例 1、

「釈尊を讃えて〜十方のひびき〜 音楽とお話の夕べ」というテーマで築地本願寺の本堂を会場として行われた。そのイベント性。

内容は、ヘパイプオルガンによる仏教賛歌の演奏↓パイプオルガンについての由来説明↓尺八と打楽器による演奏↓法話↓参加者全員による「仏教聖典」拝読と仏教劇↓法話↓パイプオルガンと尺八、打楽器による演奏↓

本堂に設置されているパイプオルガンと尺八と打楽器を交え、仏教賛歌として新しく作曲された曲の演奏会として行われた。また曲と曲の合間には法話があったり全員参加の仏教聖典拝読があったりして、テレビアナウンサーが司会進行を担当した。

参加者はパイプオルガンの演奏会というイメージで気軽に参加でき法話も宗派にこだわらない内容での配慮がなされた。また、全員による聖典拝読もあり、参加意識を高めた。

事例2、

「花まつりフェスティバル・イン・サンシャイン」(豊島区仏教会主催)に見るイベント性

会場を寺院から多くの人が集まるデパートの広場へ移し、女性アナウンサーの司会進行によって、次のような内容で行われた。

〈灌仏↓法要↓大正大学生による仏讃歌合唱↓プロのコミックバンドの演奏〉

そして、買い物客への甘茶接待が行われ、祭壇に飾られた鉢植えの花や子供用「花まつりセット」のプレゼントを配り、花まつりの啓蒙を図った。

このイベントによる、一般の生活の場に飛び出した明るいアピールは、一般の人に大きなインパクトを与え、仏教をより身近なものとして感じさせる事が出来る。また、花まつりは、通仏教的行事なので宗派にこだわらなく行えるので、仏教会や商工会と共同して町ぐるみの行事としておこなうこともできる。

事例3、

「スペースオデッセイ宇宙巡礼」(香川芸術フェスティバル'88主催)に見るイベント性、これは香川県仏教会が、県主催のフェスティバルの中で四国八十八ヵ所巡拝をテーマとして行われた一大イベントである。

内容は次のように行われた。へオーブニング↓御詠歌↓シンセサイザー・弦楽合奏・尺八の演奏↓声明とシンセサイザー↓合唱↓般若心経・散華↓

このような企画で組曲として声明・般若心経と光明真言・ご詠歌と讚仏歌・楽器利用（仏教楽器と民族楽器と近代楽器）・解説と朗読をうまく組み込んで行われた。

そして四国霊場をイメージした作曲と仏教音楽がうまく調和して、参加者と一つになっての感動を興すセッティングが良かった。また、照明とレーザー光線をうまく使って雰囲気盛り上げた。

《イベント性の条件は何か》

前記三例から次の諸条件がイベント性として考えられる

- 1、従来の形式にとられない
 - 2、場所の設定（特定の場所から生活の場所へ）
 - 3、音楽利用（西洋楽器や和楽器）映像の利用（映画ビデオ・写真・マンガ）
 - 4、解説・朗読（内容の理解と感動）
 - 5、内容・テーマをはっきりさせる、ポスター掲示・パンフの配付、進行上の解説
 - 6、日時として参加者が参加しやすい日時を選ぶ
- 主催者の検討事項としては

イ、従来の形式にとられない（マンネリ化しない）

ロ、現代のニーズに答える

ハ、参加者に分かり易い工夫をする

ニ、教師がしっかりと目的を持って行事に望む

ホ、教師は、演出的立場で行事全体のかたちを考える

参加者への検討事項としては

イ、主体的に参加できる（主催者と同一の意識がもてる）

ロ、感動できる

ハ、内容・目的がわかる↓為になる、役に立つ

この中で、特に大切な事は、そのイベントを「何のために」行なうのかという、しっかりと意識をもって、その内容にそった、わかりやすいテーマの設定である。一般的におこなわれる色々なイベント行事も含めてテーマの付け方の占める割合はおおきいとされる。

はつきりと目的にそったテーマで、抽象的でなく、内容がわかるようにすることが大切である。

例えば、「施餓鬼会」について言えばその副題として「布施（他人の為になること）のできる生活をしよう」といった、内容と目的が分かるテーマを考えることである。また対象の年代に合わせた興味をもつようなテーマ（言葉）や、その配色（字の色等）も研究する必要がある。

三、イベント的行事の具体案

それでは以上の寺院の現状の問題点と実例からイベント性の特徴を考慮して、これからの仏教行事のイベント性の諸条件を考えてみたい。

まず、分かる行事にすることである。そのためには行事の意味の徹底的説明をすると同時に、その行事はなにを目

的とするのか、住職・教師自身のしっかりした研究姿勢が必要である。そのことよって参加者側には参加する意欲、体験する感動、理解できる喜びをみいだせる。このことが一番大切な事である。しっかりした目標、テーマを持つことで行事の意義が定まるからである。

つきに参加できる場面をつくることである。そのことで全員が主体的にかかわることになるからである。つまり僧侶中心から参加者全員の調和を図る。

主体的に関与することにより、感動も大きく、また意味のあるものとなり、信仰心も生まれてくる。

以上のような行事を実現するために具体的には、次のような事が考えられる。

・シナリオ等の検討（参加者の各層に合わせた内容で一定した流れを作り解説、朗読等も入れて参加者の理解をたかめる）。

・役割分担／僧侶中心から参加者も含めた役割分担を考え参加意識をつくる——献灯・献華・讃仏歌・勤行式の唱和・仏教聖典の輪読等。

・イベント的行事の要は誰か——会奉行の在り方と演出家の育成。つまり行事の全体的視野に立って、行事の現代的な企画・計画・実行を担当していけるような人材育成。

・会場の設営（本堂の場合は照明効果・音響効果）その他の場所の検討。

・宣伝、広報活動PR紙の検討と利用。

・映像（映画・スライド・ビデオ）、音響（御詠歌・讃仏歌・雅楽シンセサイザー・邦楽・西洋楽）の検討。

・併設事業／寺宝展の開催、☆地域の活性化のため史跡マップの作成（市町村への提案）。

以上の項目を充分検討しながら行事を企画し、計画し、実行して行くことが行事のイベント的展開を考えていくう

えで大切である。また、これからは個性の時代と言われている。いろいろな意味で今後の寺院におけるイベント的展開を考えてみることも必要である。

つまり、寺院や教師の個性・特徴を生かしたイベント化、たとえば諸堂の建築設計におけるイベント化、寺院の特徴を活かした諸堂づくりとか、境内を活かしたイベント化（華の寺、まんが寺）等である。

しかし、どんなに行事のイベント化を考えても、それを活かすも殺すも教師自身の行事や教化活動への真剣な姿勢と積極的な取り組み方による事は否定できないのである。

まとめ

本来、行事のイベント化を考えることは、現代のニーズにどう答えられるか、ということである。もちろん、このことは教化の一方法に過ぎないが、宗団レベルで総合的に伝統行事の現代化を問う必要があると信じるものである。

また、行事は、それ自体目的ではなく、教師と檀信徒が共に真言宗の教えにめぐめ、生活の中に生かしていくことを実現するための手段、方法である。そのことをしっかり把握し、認識することが大切である。

全国の調査から宗教は必要であり、社会生活をして行くうえで心のより所としての期待が大きいことが報告されている。このことは、宗派が檀信徒の心のより所としての役割を果たす責任を負うことであり、広い視野にたった宗団の在り方、教師の心構え、寺院行事の在り方を通して密教国土の実現に邁進して行く事である。

参考文献

『祭りとイベントのつくり方』鶴見俊輔・小林和夫編（晶文社）一九八八年発行

『仏教行事とその思想』松野純孝編（大蔵出版）一九七六年発行

『第四の教育』萩原茂祐（日本ふるさと塾）

寺院行事とイベント的展開

- 『電通のイベント戦略』塩沢茂（PHP出版）
- 『豊かさとは何か』（岩波書店）
- 『企画・計画・実行の法則』日比野省三（こう書房）
- 『弘法と現代』小室裕充（地蔵院新書）
- 『智山教化研究』第九〜第十三号（智山教化研究所）
- 『これからの寺院行事』（真言宗智山派宗務庁）